The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	死亡統計の衛生学的研究
Author(s)	飯淵, 康雄
Citation	大阪大学, 1970, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/30054
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【7】

氏名・(本籍)	飯(いい) 淵(ぶち) 康(やす) 雄(お)
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	第 1889 号
学位授与の日付	昭和45年2月20日
学位授与の要件	医学研究科社会系 学位規則第5条第1項該当
学位論文題目	**死亡統計の衛生学的研究**
論文審査委員	(主査) 教授 丸山 博 (副査) 教授 関 悌四郎 教授 松倉 豊治

論文内容の要旨

〔目　　的〕

死亡統計の衛生学的検討にある。

内容を2つに分ける。

第(1)部：世代生命表の衛生学的立場での考え方とその意味。

第(2)部：死因統計を臨床医学との関連においてとらえる場合の，死亡診断書（死体検案書）の「死因」欄の社会医学的考察。

〔資　　料〕

第(1)部：本邦人口動態統計（但し，明治32年（1899）—昭和39年（1964）は政府公表資料，昭和19年（1944）—同21年（1946）は Public Health and Welfare in Japan. GHQ, SCAP. 1949年資料）

第(2)部：J. Graunt（1620～74）の『死亡表に関する自然的及政治的観察』（1676年刊の第5版日本語訳・昭和16年発行）と，J. P. Süssmilch（1707～67）の『Die götiliche Ordnung』（1741年初版），及び本邦の現行死亡診断書（死体検案書）。

〔方　　法〕

第(1)部：明治32年（1899）から昭和39年（1964）までの各年次順に，いわゆる世代生命表（出生年次による出生 COHORT）の考えによる男女別，年令別死亡数曲線を作図（横軸には算術目盛で年令，縦軸には対数目盛でその年令での死亡数）したものを，1枚1枚つくった。そして，各図の死亡数目盛の基準線を同一にして，1cm の厚紙（年令間隔も1cm）にはり，更に各死亡数曲線上の部分を切りとって立体化した死亡数曲線群の厚紙立体模型作製とその利用を，方法とした。

第(2)部：上記 J. Graunt や J. P. Süssmilch の著作の中に示されている「死因」名を，日本の現実の死因統計の基本となる，死亡診断書の「死亡の原因」欄の問題点と比較検討することによって，「死因」に関する J. Graunt や J. P. Süssmilch の考え方を社会医学的に分析し，死因統計の今日的課題としての新しい死因分類を試みた。

〔成　　績〕

第(1)部：（世代）生命表を，死亡比率の衛生学的意味も含めて考察するならば，出生時点に於て異質な出生年次の母集団を内包することを前提とする第2回生命表（明治32年—明治36年）と，単一母集団を前提とする明治32年出生者 COHORT の世代生命表との比較において，その生命表作成方法の理論的差異にもとづくため，第2回生命表（Current Life Table）の年令別死亡数（率）は，将来推計という利点をもつが，世代生命表にはそれがなく，単に歴史的事実関係を示すだけである。

然し，この事は，いわゆる生命表（Current Life Table）を利用する場合には，それが，世代生命表の様に，暦年的逐年令的或は動態的な一連の歴史変動の反映として，同時出生集団から死亡生残現象が生ずるというのではなく，非連続的静態的な歴史変動の結果として，出生の時代や数が異なった個々の年次の出生集団の死亡現象を，0歳から100歳まで並列して，外見上動態的なものとして示されている点に留意しなければならない事を教えるものである。

第(2)部：17世紀中葉のロンドンと20世紀後半の日本とでは，歴史的にも時代的にも，或は国情の点でも，両者の差異が大きいことに由来するが，「死因」名や死亡診断書（死体検案書）の「死亡の原因」欄は，死亡の背後にある社会的責任を隠蔽したり，すりかえたりする客観的な役割をはたす危険性が大きい。

〔総　　括〕

第(1)部：数論理を基本的な方法として展開する生命表（Current Life Table）の考え方に，J. Graunt や J. P. Süssilch の年令別死亡数についての初期構想を発展させた世代生命表（出生年次による出生 COHORT）の考え方を導入することで，生命表（Current Life Table）の誤用を防ぎ，利用範囲の拡大が可能になる。

第(2)部：本邦の死亡診断書（死体検案書）の「死因」追求の統計的方法に代表される様な，死亡の真の原因を，その身体の内部構造にのみ求める方法では，死亡を未然に防ぐ社会的或は衛生学的方策は，決してうちだされない。

以上第(1)部，第(2)部の諸点を含めて，J. Graunt や J. P. Süssmilch の死因名や死亡統計に対する認識方法は，今日的にも再評価，発展させられるべきものと考える。

論文の審査結果の要旨

本研究は J. グラント『諸観察』(1676年)，J. P. ズュースシルヒ『神の秩序』(初版)（1741年)，丸山博『乳児死亡の研究』（1935年—1957年）の方法論を継承して，日本人の寿命延長可

能の全年令にまで拡張し発展させた。

その結果，今後の衛生学上，教育ならびに公衆衛生対策について具体的な統計学的実践課題を提示する。

本論文の内容は動的な世代生命表の考え方を基礎にして，従来の死因統計分類を社会史的且つ批判的に再構成することによって，新しく有効な理論的根拠を，歴史人口学，社会衛生統計の分野に加えるものと考える。

以上の理由により，本論文は博士論文の価値ありと認む。